
DEATHRASHーデスラッシュー

浅倉 明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEATH RASH ーデスラッシュー

【Nコード】

N4040R

【作者名】

浅倉 明

【あらすじ】

これは、人々のためにある正義の陰で犠牲となっていた者達が織り成す、戦争と人間模様を描いた物語……奪われた家族や仲間のため……自分が自分としてあるため……遠い日の過ちを清算するため……彼等それぞれにしか持ち得ぬ正義を掲げ大衆の正義へと挑んでゆく、エクストリーム・ダークファンタジー。

00 / DARK INTRODUCTION —プロローグ—

村にあいつ等がやって来たのは、僕が七歳くらいの時だった。
よく晴れた日だった。

村の広場に何十人もの鎧を着込んだ大人達がやって来た。

僕や友達が不思議そうにそれを見つめていると、傍にいたおじさんが教えてくれた。

あれはシュラプネルと言う騎士団。

自分達の村を魔物から護ってくれている偉い人達なんだ、と。

「すっげえ！」

「かっこいい！」

聞いて、子供だった僕はたちまち目を輝かせてはしゃいだ。

みんなであいつに——若い騎士の一人を捕まえて、いろんな事を
無邪気に訊ねた。

どこから来たの？

どのくらい強いのか？

どんなのと戦った事があるの？

次から次へと質問は尽きず、あいつは困った顔をしていた。

「……なんだ、お前達？シュラプネルに入りたいのか？」

色々聞いた後、どうすればシュラプネルに入れるのかとみんなで
聞いた。

今さっき知ったばかりだと言うのに、あいつから聞かされた武勇
伝で、僕はすっかり

シュラプネルに入りたくて仕方なくなっていた。

「いいか？シュラプネルはうんと強くなければ入れないぞ？ただ大
人になっただけじゃあ

うちでは務まらない……いいか、大きくなって強くなるんだぞ？」

あいつは言った。

子供に夢を与える、優しく力強い口調で僕や友達にそう言った。

「お前達、名前は？」

あいつはみんなに名前を聞いていき、最後に僕の名前を訊ねた。

「ぼくはノエル♪」

その時の僕は……無邪気に、本当に馬鹿なくらい無邪気にそう答えた。

聞き終え、あいつは一人一人の名前を呟いて「うん、そうか」と頷いた。

そして、言った。

「いいか？俺の名はジェフリー、ジェフリーだ。将来、お前達がシユラプネルに入った時

仕える男の名前だ……絶対に忘れるんじゃないぞ？」

僕達の心に刻み込む様に、あいつ——ジェフリーは名乗った。

——ジェフリー。

——そして、シユラプネル。

忘れたりなどするものか。

忘れられなどするものか。

——僕の何もかもをメチャクチャにしたお前達を。

父さんや母さん……生まれてくるはずだった兄弟。

友達や村のみんな、帰る家や思い出の場所や景色。

ある日、突然だった。

お前達は村を襲い、みんなを殺した。

何もかもを焼き払った。

——お前達にも教えてやる。

両目から血を流すほどの悲しみを。

何の罪もなく全てを失い、悲しみと絶望しかない人生を強いられる苦痛を。

——誰かが言った。

お前にはまだ未来が残されている、憎しみに生きるなど。
くそくらえだ。

僕の未来には、もう何も生まれはしない。
そんな物にすがって生きるつもりもない。

——あるのは復讐だけだ。

殺してやる……最後の一人まで。

僕の人生をお前達にくれてやる。

僕の何もかもをくれてやるよ……お前達の命と引き換えだ。

——そして、一緒に地獄へ落ちろっ！

00 / DARK INTRODUCTION —プロローグ—（後書き）

数少ない読者の方、閲覧ありがとうございます。

大幅な加筆修正で読み直す手間をおかけし、大変申し訳ありません！
より作品に深みを出したため、怒らないでやって下さい（＞|＜）

01 / VENGEANCE ー復讐の獣ー (前書き)

各話一曲ずつ、イメージソングを挙げていきます（^^）
興味のある方はレンタルショップやYOUTUBEからご視聴下さい。

注..かなり激しい曲が多いので、苦手な方はご注意ください！

♪ HELLHOUND ON MY TRAIL / CHIL
DREN OF BODOM

01 / VENGEANCE ー復讐の獣ー

鬱蒼と茂る深い森を、一つの気配が獰猛な殺気を撒き散らして駆け抜けていた。

向かう先から響いてくる轟音、怒号、悲鳴――それは戦いの気配を辿っていた。

――悲鳴。

また誰か――男の悲鳴が上がった様だ。

その悲鳴は何かに押し潰されたかの様に、くぐもった感じで途切れた。

声の主は恐らく死んだ。

もうここからそう遠くない場所だ。

――怒号。

次に別の男の怒号が響いた。

悲鳴を上げた男の名前を叫んだ様だ。

――咆哮。

そして、獣の野太い咆哮が上がった――近い。

気配は最後の木々をすり抜け、その先の眼下を広がる光景を捉えた。



大国・ストロムブラッド。

その南部に広がる森林は、けたたましい怒号と轟音に静寂を破られていた。

獐猛な一撃が振り下ろされ、凄惨な悲鳴と共にまた一人が頭部を碎かれた。

「ピートッ！！！」

部隊長のヤリが、その男の名を叫んだ。
餌食となったのは今のピートで二人目。

場には剣や槍など得物を握り締めた九人の男達の姿。

彼等と対峙するのは、銀色の体毛を持つ一頭の巨大な熊。

数メートルに及ぶ巨体のそれは、狂った様に剥き出した歯を軋ませ、二つの紅い眼球で

足元に散らばる虫けら達を睨みつけている。

(……これほどとは)

目の前にそびえ立つ死の壁に焦燥を覚えるヤリ。

この大熊の肉は屈強な兵達の刃を食い止め、反撃の一撃で既に二人を屠った。

真っ向からの勝負で勝ち目などない。

すくみ上がる獲物達の恐怖を、銀色の大熊は咆哮で煽り弄ぶ。

二の足を踏み膠着する部隊。

確かに分は彼等にはない。

状況が続けば全滅は免れない——続けば、の話だが。

「全員、下がれっ！」

隊の後方に控えていた一人が怒号にも近い叫び声を上げると、前方を固めていた兵達は

それを合図に一斉に後退する。

叫んだ男は他の者が鎧を着込んでいるのに対し、ローブを着込んでいる。

それは「魔術師」と呼ばれる者の装いである。

手前の獲物達が逃げた事で、大熊は狙いをその魔術師に切り替えて突撃する。

魔術師は迫り来る大熊へ向け、両手を突き出した。

その瞬間、炎の怒濤が迫り来る大熊の視界を埋め尽くし、辺りを赤く染める。

魔術師の両手を中心に光の輪が発生し、凄まじい業火が唸りを上げ放射されたのだ。

勝機と踏み猛進して来た大熊。

突然の炎を避ける術などない。

戦慄する一瞬の内に全身を業火に包まれ、たちまち火ダルマと化した。

絶叫しながら暴れ狂う大熊の姿は、敵ながら憐憫を抱きかけるほどに凄絶だ。

その体毛と皮膚を業火に焼かれてゆき、焼けた脂の不快な臭いが立ち込める。

力押しで勝てる相手でない事は最初から明白だ。

魔術による応戦が攻めの要と判断し、他の兵達は魔術師が術を組み終えるまでの時間を

稼ぐ役目に回っていたのである。

やがて炎の鎮火と共に、大熊の動きが鈍くなってゆく。

「かかれっ！！！」

勝機！

ヤリに先導され、兵達が再び攻めに転じて前進する——戦局は逆転した。

兵達は剣や槍など各々に得物を大熊の急所を突き刺していく。業火により俊敏さを削がれた大熊に反撃の余力など既がない。

——やがて、眉間を貫いた一撃によって大熊は遂に絶命した。

◇ ◇ ◇

殉職した兵二人の埋葬を終え、兵達は少しの休息に入っていた。仲間達の墓へと祈りを捧げる者。負った怪我の処置に追われる者。他愛もない雑談に花を咲かす者。

見上げれば空一面には雲が掛かっている。

人の生き死にが入り乱れる戦場には似つかわしくもある空模様。その下で、兵達は各々に出発までの僅かな休息を過ごしている。

「……あの人、いつまでああしてるのかね」

「さあ……ま、ああしている間はゆっくり休めるだろうし」

兵達が視線を向ける先には、仲間二人の犠牲と引き換えに討ち取った大熊の屍。

その傍らに立つ部隊長——ヤリの姿があった。

「……………」

部下の埋葬を終えてからというものの、ヤリは大熊の屍の傍らに立ち続けている。

あれだけの猛威を振るっていた大熊が、後は腐敗し朽ちてゆくのを待つだけだ。

業火に焼かれ、赤い皮膚を剥き出した巨躯。

その至る所にできた無数の刺し傷や切り傷。

似ている。

ある遠い日の光景に酷く似たそれは、彼の意識を追憶へと誘っていた。

◇ ◇ ◇

焦土と化したあの場所に横たわる人々の死体。それを見つめる、血まみれな自分や仲間の姿。殺したのは自分達だ。

それらは夢ではない——八年前、実際に起きた出来事の記憶だ。

あれを虐殺以外の何と呼べばいい？

そして——その真ん中で泣き叫んだ、あの子供。

黒い髪に黒い瞳をした男の子だった。

あの子供が笑っていた時の顔も自分は知っている。

だが、名前だけは思い出せなかった。

人懐っこくて、無邪気な子供だった。

彼は泣いていた。

だが、涙を流していたわけじゃなかった。

血だった。

見間違いなんかじゃない。

彼が流しているのは透き通る涙じゃなく、真っ赤な血だったんだ。

彼は声を嗄らしていつまでも叫び続け、いつまでも両目から血を流していた。

家族を、友達を、住む家を失った彼の両目は血の涙を流したのだ。

彼をそうさせたのは——紛れもない自分達だ。

俺達のした事が正しかったか否か。

あの子供こそが、全ての答えじゃないのか？

◇
◇
◇

「——報告にあった銀色の熊……こいつと見て間違いなさそうですね」

「……！」

不意に横から言葉をかけられ、その思考が断ち切られる。
見やると、声の主は先の戦闘で炎を放った魔術師の男だ。

「……その様だな」

少し間を置いてヤリは言葉を返す。

感慨に耽り過ぎた余韻で、その返事は少し緊張感を欠く。

「……他に仲間がいる可能性も」

「なくはない……祈るばかりだ」

彼等はシュラプネルと呼ばれる騎士団の者達。

数十年前に起きた魔族との大戦におき名を馳せた英雄により結成され、辺境に出没する

魔物達の討伐を請け負い続ける、ストロムブラッド最大の武装勢力である。

ここ最近、この森を中心に先ほどの様な魔物が出没し始め、鹿などを狩りにやって来た

近隣の住民が犠牲になっているとの報告が入り、今回十一人編制の部隊で討伐へ来た。

「は、はあ」

ヤリの不自然な受け答えに、魔術師の男も多少の違和感は覚えていた。

そこで会話は終わってしまい、気まずい沈黙が生まれる。

(……いかん、いかん)

ヤリはどうか目の前の現実を意識を引き戻し、辛うじて言葉を紡ぐ。

そもそも、部下を二人も死なせておいて、何を敵に同情などしている。

「ところですまん……君、名前は何と言ったかな？」

「ロバートです」

ヤリに問われ、魔術師のロバートは名乗る。

まだ若い、二十代前半ほどの青年だ。

「ん、そうだ、ロバートだったな……うちはもうどれくらいになる

？」

「二年……ほどだと思いますが」

「そうか……うちも規模が大きいからな。顔と名前が一致せんで困る」

「ははは。お役に立てる様、鋭意務めさせていただきます」

「ふむ、なかなかの模範生だな」

「そんな」

言われ、ロバートが少し照れ笑いをする。

「……………」

ヤリはロバートの顔を見つめる。

真摯で従順な青年のその顔を見て、ヤリの中に再び先ほどの闇が蘇った。

「……君はこのシユラプネルを正義と思うかね？」

「……は？」

あまりに意外で唐突な問いに、綻んでいたロバートの顔は凍りつく。

ヤリの顔を見る。

日々の職務に心身を磨り減らされた疲弊とも違う、何かに真摯に葛藤するかの様な酷く

影のある顔を向けているのだ。

どうしてそんな事を聞くのか——ロバートの心中を見透かしてヤリが続ける。

「君は昔の俺と似た目をしている……まっすぐな目だ。君だけじゃない……若い連中には

そういう目をして入ってくる者も多い……正義感に溢れたな」

「……隊長？」

「人々の平和を俺達は本当に護っているのか？」

視線を伏せながら問いかけるヤリ。

答えられるはずもない。

視線を下へ逸らしながら、何か言葉を紡がなければと唇を開きか

けるロバート。

それに気付き、ヤリはハッと我に返る。

「いや、すまん……忘れてくれ」

ヤリは苦笑いをし、ロバートの肩をポンと叩く。

「先はまだ長い。まだまだこんな化け物とも出くわすはずだ……気を張り続けてろ？」

ヤリはそう言い残し、その場から去って行った。

「……………」

訝しげな顔でロバートはその背中を見送る。

底知れぬ罪を抱える者の様なその後姿——そして、先ほどのあの顔。

(……確かに噂通りだ)

ロバートはヤリと仕事を共にするのは初めてだったが、今の様にどこか影のある病的な

言動は先に周囲の噂で聞いていた。

あの人は病んでいる——と。

戦士としては有能だが、彼の精神は既に廃人の域なのだ——と。

実際、これまでに何度も除隊を勧められているとも聞いていた。

だがそれを拒み続け・留まり続ける彼を周囲は理解できず、敬遠してもいた。

ある時、先輩からこんな話を聞いた。

彼がそうなった引き金と見て間違いないという事件だ。

◇ ◇ ◇

自分が入隊するより以前。

今から八年前——国の南東に広がる山岳地帯で起きたと言う事件だ。

シュラプネルはトアフォスタと言う山村を襲撃し、村人達を皆殺しにしたと言う。

老若男女を問わず焼き尽くし、殺し尽くし――。跡形もない焦土と消えた山村には、屍の群れと化した村人達が散らばっていたと。

――シュラプネルは人を殺した。

その事件は、あくまで今日まで公の場には伏せられ続けていると言う。

それも当然だ。

先の大戦における英雄によって築き上げられ、何十年という長きに渡り人々の暮らしをシュラプネルは守り続けてきたのだ。同じ人間に対して一方的な大量虐殺を行ったというその事實は、紛れもなくその名誉と存在そのものの善悪を壊し、覆してしまふ。

――何故、そんな酷い事をした!?

自分は激昂した。

そんなのただの人殺しじゃないか!?

自分はそんな人殺しの集団に忠誠を誓ったのか!?

声の限りに罵声を浴びせ、問い詰めた。

――その答えは返ってきた。

それだけの暴挙に至ったシュラプネルの動機。

それはシュラプネルが行った大罪を肯定するに足るはずもなかった。

足すはずもなかったのだ――だが、自分にはそれ以上の糾弾はもうできなかった。

燃え上がった怒りが徐々にわだかまりへと変わってしまった。

——そして、こう言われた。

シュラプネルという組織は、いついかなる時も善である物とは限らない。

時として悪にならざるを得ない事もある。

それにより自分達を憎む者も、離れて行く者も現れるだろう。だが、我々は自分達が築いてきた正義を曲げる事はできない。

我々を憎む者が現れたなら、それを正面から打ち碎かなければならない。

去ってゆきたければ去ればいい。

わだかまるならば留まればいい。

そして、シュラプネルが成す正義の形を見極めてみる——と。



「……………」

あの時の自分が苛立っていたのを覚えている。

シュラプネルへの怒りは違う。

何が正義で何が悪か……それを定める事ができないジレンマにだ。

——人々の平和を俺達は本当に護っているのか？

先ほどのヤリの言葉。

彼——ヤリがその事件に関わった一人である事も聞いてはいた。あれは紛れもなく、当時の罪悪感に苛まれた心の現われだろう。彼としての答えは出ているのだ。

彼はシュラプネルを悪と定めたはずだ。

だと言うのに、何故この場に留まり続けるのかは分からない。

そこまで干渉する気もない——彼個人の問題だからだ。

自分は答えを探している。

このシユラプネルという組織が、果たして善なのか悪なのか。いや、違う——その答えとはそんな単純な善悪などではない。善か悪かを超え、自分がそれを受け入れるか否かという事だ。

◇
◇
◇

ヤリもロバート達も気付いてはいなかった。

先ほどの戦闘に引き寄せられやってきた、新たな気配とその視線に。

それは彼等が休息をとっている場所からは少し離れた木の上にいた。

「……………」

茂る葉の陰から、それは彼等の様子を獰猛な双眸で凝視する。

木の幹を掴む右腕が微かに陽射しを受け、暗がりから浮き上げると、それは悪魔の腕を

模したかの様な毒々しい輪郭を成していた。

◇
◇
◇

あの出来事だけじゃない。

このシユラプネルという組織が、自分達の正義のため他の誰かを犠牲にする姿を。

その犠牲となった誰かが、その叫びすら握り潰され消えていった姿を。

その事実を黙認し続ける仲間や自分自身の姿を。

俺は何度も何度も見てきた——見せられてきた。

俺の中の信念や忠義やなど、とうに枯れ果てた。

何度もここを去る事を考えた。

もう耐えられなかった。

だが……できなかった。

俺自身が、戦いを生業にする事に慣れすぎてしまっていた。

これ以外、自分にどんな道があるのか分からなかった……怖かったんだ。

自分が路頭に迷う姿が何度も頭に浮かび、結局ここにしがみ付いている。

俺は――

「……………」

悪い癖だ……これ以上はやめよう。

仕事中だし……部下もいる。

ヤリはふと我に返る。

一時間ほどの休息を終え、シユラプネルの兵達は再び森を進み始めた。

報告にあった問題の魔物は、先ほどの大熊の事と見て違いないだろう。

目的は果たした……彼等の仕事はこれだけでは終わらない。

彼等が次に探している物……それは「臭い」だ。

この深い森を進むにつれて、彼等の嗅覚は徐々にある臭いを拾っていた。

辺りに茂る植物の臭いでも、血の臭いでもなく、腐敗臭ともそれは違う。

化学的な――ガスの臭いだ。

彼等はこの臭いの源を探し、森を進んでいる。

「……………！」

視界の左端で動く何かを捉え、ヤリは足を止めた。

追従する兵達も彼の緊迫した空気を察知し、素早く身構える。

——いる。

向こうに——木々のを挟み数十メートルの所に、確かに何かがいる。

大きさは相当だ——魔物に違いない。

茂る木々に光を遮られ、輪郭はハッキリと捉えられない。

だがそれが宙を飛び、木々の隙間を悠々と漂っているのは分かった。

鳥?……それにしても、やけに動きがうねっている。

身体を左右に振りながら、まるで水中を泳ぐ様に……あれは!

「……やはり、さっきの一匹だけじゃなかったか」

その何かがこちらを向く……敵に気付いたのだ。

木々の暗がりには紛れたその顔どころか全貌すら、ヤリ達には捉えられない。

だが殺気に満ちた眼光を向けられている事は、全身を走る戦慄が教えている。

「来るぞっ!」

ヤリが叫ぶ。

それが一直線にこちらへ突撃してくる!

巨大な口を開き、暗がりから飛び出したその輪郭を彼等の目は捉える。

それは魚……紛れもなく魚だ!

種類は鮭か何かによく似てはいる。

しかし、先ほどの大熊と同じく常軌を逸した巨軀をしており、距離が開いていれば鮫か

何かと見間違えても不思議はない。

それが水もない場所を……木々の隙間を魚が泳いでいたのだ。

「伏せろっ!!!」

ヤリの合図で全員が身を屈め、魚の突進をやり過ごす。
魚の魔物は勢い余って大木に突っ込み、轟音が上がる。

魚と言うのは障害物に激突した衝撃で死んでしまう物だが、こいつは違った。

砕かれたのは大木の方だ。

魚の魔物は今の激突を物ともせず、ヤリ達の方を向き直す。

一同はその形相に蒼然とせずにはいらなかった……笑っているのだ、魚が。

魚が人間の様に――笑みを浮かべる狂人の様に口元を吊り上げ、太く獴猛な牙を覗かせ

こちらを見やっているのだ――瞳のない真っ白な目玉で。

「なんて事ない……さっきの奴より全然軽いですよ、こいつは」
だがそれにも動じず、兵の一人・トーマスが不敵な笑みを浮かべる。

「隊長！先を行ってください！ここは俺とダンで片付けます！」

「俺かよ！」

いきなり名指しされたダンが迷惑そうに声を上げる。

「生きてこちらに追いつけ！いいなっ！？」

ヤリはロバートの他五人を引き連れ、森の先を急いだ。

ダンは「おいおい」という顔で遠ざかる本隊を見送る。

「……さあ、来やがれ」

トーマスはダンの先に立ち、魚の魔物と対峙する。



星の瘴気。

この世界に魔物を生み出しているガスはそう呼ばれる。

世界各地の地底から噴出するとされるその瘴気は、学者や魔術師達の間で星そのものが

生み出す有害物質とされており、あらゆる生物の細胞に変化をもた

らすとされる。

前例をあげれば先ほどの大熊の様に通常とはかけ離れた体躯に成長する他、翼の生えた

野犬などと言う、部位の奇形な発育も挙げられ、特に成長期までの生物がこの瘴気の中で

生活する事でそういった変化が顕著だとされる。

この世界ではそれらの生物を「魔物」と定めているのだ。

「……近いな」

呟くヤリ。

森を進むにつれ、瘴気の臭いが強まってきている。

追従する他の五人もそれに気付いていた。

彼等の役目とは魔物の討伐の他、その瘴気を封印する事にあった。魔物は瘴気によって生み出される。

ならば、魔物が出没する場所には必ず瘴気が発生していると言う事なのだ。

「……ここか」

探索の終着点——それは小さな湖だった。

トーマス達と分かれた場所からそう遠くはない。

瘴気は湖の水から発生しているのではなかった。

湖の中に佇む岩盤——そこに入った亀裂から漏れているらしかった。

目を凝らせば、微かに紫がかったガスが漏れているのが分かる。

それこそが先ほどから嗅覚を刺激している臭いの正体——星の瘴気である。

星の瘴気は、いついかなる場所から発生するか誰にも予測はできない。

ただ、人間達に干渉されない自然の中に発生する事が傾向はある様だ。

すなわち。

俗世で呼ばれる「魔」とはこの星そのものが生み出している産物

であり、彼等人間達に

できる事は、自分達の暮らしの害になる場所に発生した瘴気をできる限り遮断し、それに

あてられた「魔」を討伐してゆく事にすぎない。

「ロバート、頼む」

ヤリに促され、ロバートが前に出る。

ローブは脱がず、着衣のまま湖の中を岩盤へ向かって歩いていく。岩盤まで辿り付くと、ロバートは金槌と鉄の杭を取り出し、杭を岩盤に打ち始める。

甲高い硬質な音が湖のほとりから見守るヤリ達の耳にまで届く。杭を通して、瘴気を噴き出している岩盤に封印の施術を施すのだ。魔術師であるロバートがヤリ達に同行した理由は、単純に戦闘における後方支援という

だけではなく、瘴気を封印するための施術も兼ねていた。

杭を打ち終えると、次にロバートは手をかざして目を閉じ、呪文を唱え始めた。

魔術師でない者には聴きなれない、特殊な言語による詠唱。

この瘴気を塞ぐための術を施しているのだ。

次第に打ち付けた杭が蒼白い光を帯び始め、瘴気を噴き出している岩盤にも伝わる。

ロバートは詠唱を唱え続ける。

「……エントウームドと言うのは、これとは比べ物にならないのでしょうか？」

「さあな、俺もその土地を見た事はないものでな」

兵の一人がヤリに訊ねる。

エントウームド。

埋葬された、という意を持つその場所は、この瘴気が世界で最も異常発生する場所として

知られており、かつては「魔界」と呼ばれていた場所である。

そのエントウームドの住人達は、人も獣もみな異形な姿へ進化し

ていると言い、彼等は

世界から畏怖と拒絶を込め「魔族」などと呼ばれている。

「……しかし、だいぶ派手に暴れているな」

ヤリ達はトーマス達を残してきた方角を見やる。

その方角から断続的に轟音が聞こえてきていた。

◇ ◇ ◇

——轟音！

——轟音！

——轟音！

——轟音！

——轟音！

凄まじい轟音が森に繰り返し響き渡る。

それは魚の魔物が木や岩など、障害物に激突する度に起こる音であつた。

「そら、行つたぜっ！」

トーマスはまるで遊んでいるかの様だ。

だが、それにつき合わされているダンの顔には遊びなど欠片もない。

襲いかかってくる巨大な魚をギリギリまで引きつけ、それをかわす。

魚はその反動で獲物の背後にある木や岩などの障害物へと激突する。

二人は先ほどからそれを繰り返していた。

魚の魔物からは目に見えて、最初ほど動きにキレがなくなっている。

大木を砕く力と頑丈さがあるうと、これだけ衝突を繰り返せば負荷は必ず掛かる。

初めはその迫力に気圧されはしたが、やはり動きは直線的でワンパターンだ。

上手く障害物へ激突する様に誘導し続ければいい。

「そろそろ仕上げるか……いいか、一発で仕留めるぜ？」

トーマスに言われ、ダンがコクリと頷く。

来いよ——トーマスは楽しげに魚の魔物を挑発する。

誘われ、魚の魔物は業を煮やし頭上から二人へ襲いかかる……それで最後だ。

二人はそれをかわすと、魚が地面へ激突した所でその脳天に刃を叩き込んだ。

魚は悲鳴をあげ、少し地面の上を暴れ狂った後、パツタリと動かなくなった。

「な、軽いモンだったろ？」

「ほとんど逃げ回っていただけの気もするが」

「馬鹿言え。正面から力比べして勝てるわけねーだろ？人間はココが一番の武器なの」

釈然としないらしいダン。

トーマスはケラケラと笑いながら、自分の頭を指でコツコツ叩いて見せる。

「人間の身体でこんな化け物と真っ向勝負できる奴って言ったら、ロスぐらいだぜ？」

「ロス……ああ、あのツルッパゲにヒゲの……あれは確かに化け物かもな」

「あのおやつさんなら、素手で人間を粉々にできそうだからおつかねえよ」

「だな……ははっ——！？」

だがそこでダンの笑いは自身の上半身と共に、トーマスの目の前から消失した。

血の夕立ちを降らせながら、ダンの残った下半身が鈍い音を立て地面に倒れる。

「!!!?」

一難越えた余裕が不意に恐怖へ変わり、凍り付くトーマス。

不意に横の茂みから飛び出した新たな影。

ダンの上半身を食い千切ったそれは……やはり巨大な体軀をした狼だった。

一匹ではない。

トーマスの位置から確認できるだけでも、三頭はいる。

消えた上半身が狼の口内で硬く湿った音を上げて咀嚼され、肉と骨の粒と消える。

残された下半身も気付けば他の狼達に群がられ、跡形もなくなっていた。

そして、狼達の視線がトーマスへと移る。

食い足りない——訴えかけてくるいくつもの瞳と牙。

確信として脳裏をよぎる死に、トーマスは震えながら立ち尽くす。内の一頭がトーマスに牙を向き、襲い掛かってきた。

「う、うあぁっ!!!!」

——死。

トーマスは両目を閉じ、悲鳴を上げた。

だが次の瞬間、閉じた瞼の向こうで何かがけたたましく倒れ、地が大きく揺れた。

腰が抜けかけていた彼はその衝撃に踏ん張る事ができず、尻餅をついてしまった。

(……!!!?)

トーマスは恐る恐る涙の浮かぶ両目を開き、その先に広がる光景

を見た。

そこには――自分に襲い掛かろうとした巨大な狼が倒れていた。何が起こったのか。

その狼の身体からは頭部がなくなっていた。

そして、頭部があるはずの場所の地面には何か黒い塊が蹲っていた。

その一瞬を目撃した残り二頭の狼達は竦み上がっている。

突然頭上から降ってきた何かが、獲物に食らいつこうとした仲間の頭を潰したのだ。

(……人間?)

黒い塊には所々、人間の肌色の様な箇所があった。

それがゆつくりと――血溜まりの上で立ち上がる。

よく見れば、それは黒装束に身を包んだ――人間の少年であった。小柄で歳は、十代半ばほどだろうか？

黒髪に黒い瞳。

着込んだ黒装束は現代で言えば、黒のタンクトップにデニムパンツの様だ。

そして、両腕には悪魔の腕を模したかの様な手甲。

左の腰には、まるで鞭の様に円状に束ねた鉄の鎖。

両肩や胸元には毒々しい黒の紋様が彫られていた。

「……………」

ぶつかった視線にトーマスは戦慄する。

少年の――その瞳。

感情のない……いや、ある一つの感情だけを宿しているかの様な黒い瞳。

自分が助けた相手だと言うのに、それを見やる黒い瞳は鋭い輝きを宿している。

「……………」

少年は言葉を発さず、自分の背後で立ちすくむ狼達に向き直す。

狼達は怯えていた。

少年は自分の何倍もの体軀を持つ狼達を、怯えさせているのだ。恐怖を取り払おうと、残る二頭は少年へと走り出す。

だが、それも死に急ぐ結果に終わった。

少年はかわした一頭目のコメカミに右腕の一撃を叩き込み、先ほどの一頭の様に頭部を

吹き飛ばしてみせた。

そこへ迫る二頭目。

頭上へ跳びかわすと左腕で手刀を横薙ぎに放ち、その首をはね飛ばす。

首が明後日の方向へ飛んでいった二頭目の身体は、トーマスのすぐ傍らを走りぬけると茂みの中まで突っ込み、何かに激突して止まった様だ。

「……！！！」

あれだけの怪物二頭を大掛かりな武器や魔術もなく倒してしまった少年に、トーマスは尻餅をついたまま絶句するしかなかった。

「……………」

敵はいなくなった。

少年はトーマスの方に向き直す。

トーマスは地面に尻餅をついたまま、少年の顔を見上げている。見つめ返す少年のその目は――まるで人間のクズを見る様に冷たかった。

「……あんた達、シユラプネルだな？」

そして冷たく問いかける。

少し幼さが残る高い声だ。

だが、そこに宿る得体の知れぬ仄暗さは、愛らしさなどまるで感じさせない。

あまりの光景に凍り付いたトーマスは、質問を投げかけられたのだと気付くまでに少し時間がかったが、ようやく我に返って地面から腰を上げると、そ

れに答える。

「あ、ああ……そうだが」

噛みながらも、辛うじて問いを肯定するトーマス。

少年の身体が前へ動く。

「助かったよ——さすがに死ぬかと思っ——」

トーマスは礼を言おうとし、握手を求めて右腕を前に出す。

だが言葉を紡ごうとした彼の思考は、不意に右腕の感覚が消えた事で断ち切られた。

「——た」

語尾を口にしながら、トーマスは自分の腕によく似たモノが地面を転がるのを見た。

そして——絶叫があがった。

◇ ◇ ◇

俺はこの先、どうすればいい？

死ぬまでここに居続けるのか？

このシュラプネルに引き摺られながら、磨り減っていくのか？

「……くそっ」

部下達とロバートの施術を見守るヤリ……彼の胸に心の闇はまたも囁いていた。

前触れもないヤリの悪態を、部下達は訝しがる。

今日はどうかしている。

訝しがっているのは、ヤリ自身もそうであった。

こんな葛藤はいつもの事だ。

だが——何かが今日は違う。

何かが起ころうとしている。

何かがやって来る気がする。

まるで、何かの予兆の様だ。

——悲鳴。

「!!!!」

次にヤリを現実へ引き戻したのは、聞き覚えがある人間の悲鳴だった。

——トーマス!

ロバートの施術は完了しつつあった。

蒼白い光を帯びていた岩盤が、徐々に元の重厚な黒へと戻ってゆく。

だが岸でそれを見守るヤリ達の意識は、今の悲鳴の方へ向いていた。

繰り返した轟音の後にあの悲鳴——何が起きたのか。

やられた? ——ダンもか!?

分からない。

だが、施術が終わるまで彼等は湖を離れる訳にはいかない。彼等の胸に焦燥と苛立ちが募ってゆく。

◇ ◇ ◇

「——はっ、はっ、はっ、はっ……!!!!」

逃げ惑う者の荒れた息遣い。

土と草を散らしてゆく足音。

あの後に残す、おびただしい鮮血の染み。

——それはトーマスであった。

もつれかけそうに走る足は、ヤリ達が向かった森の奥を目指していた。

気も触れかける右腕の激痛と、大量の出血がもたらす殺人的な脱力感。

それすらも忘れさせる恐怖の気配。

すぐ背後に感じるそれに、彼は突き動かされていた。

違った！——違ったんだっ！！！！

アレは味方などではなく、自分達を助けたわけでもない！

アレの獲物は初めから魔物ではなく、自分達の方なのだ！

ただ単に——獲物を横取りされるのが気に入らず、割って入っただけなのだ！

アレは人間じゃない——魔物と同じ……化け物だっ！！！！

シュラプネルの兵としての誇りなんてどうでもいい——死にたくない！

トーマスは道を走り続ける。

幸い、道は延々と一本道なので迷う事こそなかった。

「——！！！！」

やがて、木々の向こうに水の反射の様な物が見えた。

おそらく湖だ——あそこに仲間達がいるに違いない。

「隊長っ！隊長おおおっ！！！！」

トーマスは叫び、仲間達へ自分の存在を死に物狂いで訴えかける。

その矢先だった。

「タイツ——」

その胴体に何かが絡みつき、彼は前のめりに地面へと倒れこんだ。呼吸が一瞬止まるほど、激しく顔や胸と強打する。

——ギチッ。

何が起き、何が身体に絡みついたのを見る事は叶わなかった。
ただ——それは鎖が張った時の様な音に似ていた。

「——ひいっ！！！」

精悍な男の喉が、裏返った断末魔の悲鳴を上げる。

彼はそれにより、仲間達に自分の存在を知らせる事となった。

◇
◇
◇

二度目の悲鳴——やはりトーマスだ。

近い……声は恐らく自分達が湖まで来たあの道からだ。

あの悲鳴は……何かから逃げて来ていたのか？

悲鳴の前に「隊長」と叫び声が聞こえていた気もする。

「トーマス達……」

部下達の顔に緊張と不安の色が宿る。

ヤリは湖の方を向き直す。

見ると、亀裂から噴き出していた瘴気は既に止んでいた——施術に成功したようだ。

ロバートが岩盤を離れ、岸へとゆっくり戻ってくる。

これでようやく動き出す事ができる。

「……ぬかりないな？」

ロバートにヤリは問う。

ロバートの顔には、微かに施術の疲労が浮かんでいた。

「はい。これでしばらくは問題ないはず——」

「隊長おっ！！！」

その時、兵の一人が叫んでヤリは振り向いた。

「！！！」

目に飛び込んできたそれが何かを認めるより先に、ヤリは咄嗟に身体を屈めた。

相当な質量を持った何か。

大気を唸らせながら、その何かは屈んだヤリの頭上を突き抜けた。

「!……ロバートッ!!!」

ヤリは顔を上げ、叫ぶ。

ロバートはそれをかわす事ができなかった。

巻き込まれた彼は湖へと十数メートルも吹き飛ばされ、飛来したその何かと共に激しい

水飛沫を上げながら、水面へ叩きつけられた。

「ロバアアアトッ!!!」

彼の名を叫ぶヤリ。

だが、駄目だ……あれでは即死だ。

ヤリ達は飛んで来たその何か……ロバートと共に湖へ沈んだそれを見た。

トーマスだ!

それは先ほどの悲鳴——トーマスの死体だった!

——ジャラッ。

背後で金属の様な音がした——鎖が揺れる様な音だ。

『!!!』

ヤリ達は振り向く——そこには、

そこには黒い——黒尽くめの少年が独り立っていた。

『……!!』

突然の襲撃に昂る激情を押し殺し、ヤリ達は構える。

自分より背丈もある精悍な男達に敵意と刃を向けられても、この黒い少年は表情一つも

崩す事はない——ただ、その黒い瞳に宿る炎だけは燃え盛っている。

少年は右手に束ねた鎖を左の腰へ納める。

あの鎖でトーマスを拘束し、投げつけてきたとでも言うのか？

「お前は？」

「……………」

問いかけるヤリ——少年は鈍い光を放つ瞳でこう名乗った。

——トアフオスタ、と。

「!!？」

静かに呪いを込める様にこう名乗った。

ヤリは耳を疑い、彼の様子には明らかな動揺の色が浮かぶ。

ドクンツ、と重く高鳴る心臓に窒息しかけ、世界が傾く様な錯覚さえ覚える。

——トアフオスタ。

頭に胸に——その名が鈍く重く響く。

シュラプネルが……自分が忘れてはならぬ、あの村の名が。

——だが、それだけではなかった。

その少年は似ていた。

黒い髪や黒い瞳——そして、その顔立ち。

それが誰に似ているのかすぐに分かった。

その誰かというのが誰なのかも分かった。

そして、この少年が誰なのかも分かった。

——それで全ての答えは出てしまった。

「……俺達を殺しに来たのか」

「……」

少年は言葉を返さない。

彼が沈黙をもって「そうだ」と肯定しているのがヤリには分かった。

トーマス達をやったのはこいつだ。

少年がゆっくりと腰を落とす。

彼と共に少年と対峙する五人の兵達も、ヤリの動揺に気付いてはいた。

何をそんなに動揺しているのだろうか？

彼等にはそれを訊ねる余裕も――

――時間も、もう残されてはいなかった！

少年の足が力強く地面を弾き、矢の如くヤリ達へ疾走する。

『……！』

予測を上回る敏捷――速い！

前方を固めていた兵達は、驚愕する一瞬に内に懷へと滑り込まれる。

次の瞬間、二つのイビツな悲鳴が上がった。

少年が打ち込んだ両の拳に、兵二人の身体が腹を中心に碎け散った。

それはまるで、彼等の身体が独りでに破裂したかの様にすら見えた。

彼等は少年に、辛うじて視線を追いつかせるまでしかできなかった。

『……！！？』

ヤリ達は目を疑う。

この少年は先ほどの大熊にも引けを取らぬ怪力で、装甲を纏った兵を碎いたのだ。

少年は二人の残骸が地に倒れるより速くその隙間を擦り抜け、次

の標的へ襲いかかる。

地を滑る様にしなやかな足運び——まるで黒い猫。

足を止めず、左腕で放った手刀がまた一人を脳天から下へ両断する——三人目。

次の兵が少年を目掛け、槍を突き出した。

狙いは心臓。

正確な一撃。

だが、切っ先が穿孔したのは空気だけだ。

少年は突撃するスピードを殺さぬまま、最小限の動きでそれかわし、左頬のすぐ横を突き抜ける槍の柄に掴みかかる。

「うおっ!!?」

槍を握った兵は思わず声を上げる。

自分の身体が、上下逆さまに宙へ浮いてゆくのだ。

少年は自分の倍も重量があるはずの兵を、槍と共に頭上まで持ち上げたのだ。

そのまま後続の一人へ飛び掛かる。

「あっ、あっ!……うああああっ!!!!」

少年が巨大な金槌の様にそれを振り下ろす。

頭上から迫る巨大な影に、後続の一人は悲鳴と共に押し潰される。槍を握っていた兵も激突の衝撃で全身を強打し、絶命する。

轟音と共に起こる粉塵のカテーン。

——これで五人。

ヤリの前方を固めていた兵五人が全滅するまで、一分と掛からなかった。

数え切れぬ修練と死地に鍛えられた兵達でさえ見切れぬ敏捷。

鋼の防具を纏った強靱な肉体をも切断する、怪物じみた豪腕。

驚愕を超えてヤリは戦慄する。

だが、それを許す余韻など一瞬たりともなかった。

「!!!!」

まだ止まぬ粉塵の中を突き抜け、少年はついにヤリの眼前へ到達する。

少年が斜め下からヤリの脇腹を目掛け、右の一撃を繰り出す。

ヤリは咄嗟に後へ身体を逃がし、ゴウツと眼前の大气が唸る。

「ぐっ!!!?」

激痛!

今の一撃が胴の装甲を掠め、腹の皮までを持っていった。

互いの得物は拳と剣——間合いで言えば、ヤリの方が圧倒的に優勢のほうである。

先の一撃をかわし、少年の頭部に一刀を浴びせる事もできたはずであった。

しかし、今のヤリにそれを生かすだけの力はなかった。

過去の幻影に心を抜け殻にされた彼には、牽制も反撃もままならなかった。

——そう、これはあの時の子供だ。

——あの焦土の中、血の涙を流して泣き叫んだあの子供。

ヤリの心は揺れた。

自身の心を冒し続ける過去の亡霊——それが今まさに目の前に現れたのだから。

——だが、死ぬわけにいなかった。

死の警笛を打ち鳴らす激痛が彼を戦場へ引き戻し、武器を構えさせる。

間合いと取り直し、敵を——過去の亡霊を討てと己を激しく叱咤する。

少年がヤリを追撃すべく、更に踏み込んでくる。

「うおおおっ！！！！」

意を決し、ヤリは応戦に出る。

自分の額へ振り下ろされる剣を、少年は両の手甲で受け止める。

ギギッ……と、拮抗する刃と手甲が擦れる耳障りな音。

続け様に右から横薙ぎに刃を繰り出すと、少年は後方へ飛び退きそれをかわす。

「！！！！」

少年は思わず瞠目する。

今の二撃目からほぼ間入れずヤリは既に追撃を始め、すぐ眼前に迫っていた。

速い――ヤリは次の一撃を左上から少年へと振り下ろす。

体勢が整いきらぬ少年は、右の手甲のみでそれを防ぐ事を強いられる。

辛うじて刃を受け止め、少年が歯を剥き出して低く唸る。

その刃を左へ流し、それと同時にヤリの左へと滑り込む。

ヤリの胴体を裂かんと左腕を右へ水平に振りかぶり、横薙ぎにしようとした。

「！！！！」

だが矢先、少年の顔が大きな手で鷲掴みにされる。

ヤリが咄嗟に剣の柄から左手を離し、少年の顔を掴んだのだ。

そして聞き慣れぬ言語で何かを叫ぶと左手が発光し、突風が巻き起こったのだ。

強風がゼロ距離から顔面に直撃した少年は、身体を数メートル後方にまで吹き飛ばされ無造作に背中から地面へ打ちつけられた。

小規模な突風を起こす――初歩的な魔術の一つである。

ロバートほど専門的ではないものの、ヤリにも多少は魔術の心得があった。

少年はヤリが一撃を振り下ろす刹那、瞬間的にスピードを加速させ、彼のすぐ懷にまで

距離を詰めてきた——間合いによる先攻と後攻を覆してしまった。

少年が両腕の手甲を交差させる。

「——」

不意に互いの視線が重なり、ヤリは永い一瞬の中にいる様な感覚を覚えた。

ヤリは少年の瞳を——その奥に宿した情念と過去を垣間見てしまったのだ。

この子供が自分達への憎しみを糧に生き延びてきた日々を。
何百・何千と自分達の息の根を止めるその時を描きながら。
傷つき・嘆き・病み・歪み——。

少年が交差させた両腕を翼の様に左右へ展開した。
八本の爪に、ヤリは装甲ごと胴体を切り裂かれた。
もはや地面を踏み締める力すら奪われ、ヤリは鮮血を散らしながら崩れ落ちた。

◇ ◇ ◇

戦いの喧騒が去った森の静寂の下、ヤリは仰向けに倒れていた。
流れ出る真っ赤な血潮にも構う事はなく。
傍らまで歩み寄る敵に抵抗する事もなく。

「……………」

少年がヤリのすぐ傍らに身を屈め、彼の顎を掴んで顔を自分の方に向けさせる。

哀れみの欠片もない冷たい瞳で、命の灯が消えかけるその顔を覗きこむ。

「———おっ、あっ」

ヤリは何か言葉を発しようとしてる。
だが、既にそれすらも叶わぬらしい。

「あんたもあの時の一人だよな？」

静かに皮肉げな声で少年はヤリに問いかける。

「土産屋のヘルゲおばさんに捕まって、散々売りつけられてたよな？
よく喋る商売好きなおばさんだよ……覚えてるよな？」

「――」

言葉を紡げぬヤリは胸の内に、その答えを浮かべる。

ああ、覚えている。

あの元気の良いおばさん。

ロクに金もないと言っているのに、あれ買えこれ買えとしつこかったな。

お前はあの時、店の品物……人形か何かの瓶を倒して怒られた子供だな。

「あれからの八年はどうだった？……俺はあんた達を殺す事ばかり考えてたよ」

息も絶え絶えな相手に積年の怨嗟を、少年は浴びせかける。

「死ぬのはあんた一人だけじゃない。他の奴等も一人残らず後を追わせてやる……俺達の

人生をメチャクチャにした奴はみんな死ぬんだ……最後の一人まで殺してやる」

秘めた憎悪の全てを込めたその言葉をハナムケに、少年は右腕を振り上げる。

それを見上げながら、ヤリは霞んでいく意識に身を委ねる。

すまなかった。

あの時からずっと詫びたいと思い続けてきたというのに。

お前が実際に目の前に現れて、俺は自分の罪からも逃げたくな
てしまった。

怯えてしまった……繕い様もない言い訳すら探しかけた。
あれだけの事をしておいて、自分が生き残る事など望んでしまっ
た。

ああ、そうさ——悪いのは俺達なんだ。
お前から何もかもを奪った俺達こそが、本当の——。

振り下ろした少年の右腕がヤリの頭部を四散させた。
ヤリという人間だった面影も。

彼がこの八年募らせてきた自責の念も。
何もかもが血の粒と消え、辺りの地面や草木に散った。

その直前に、ヤリはようやく思い出す事ができていた。
この黒い少年の名を——あの時、焦土の中で血の涙を流し泣いて
いた子供の名を。

（こら、ノエル！触るなって言ったでしょうが！おとうちゃんに弁
償してもらおうよ！）
（わーっ♪）

ああ、そうだ。

あのおばさんに捕まって参ってた時だ。
ちょうど、あの子供が店の品物を倒してくれて逃げられたんだっ
た。

ノエル——そう、ノエルだ。
その子供は……確かにそう呼ばれていた。

◇
◇
◇

「……………」

右腕を突き出したまま、少年——ノエルはその紅い血溜まりを見つめていた。

復讐のために人を殺めた罪を、正面から見つめているのだ。

自分は人を殺した——これから殺し続ける。

その現実と罪を直視しながらも揺るがぬ心に、彼は静かに奮い立つ。

立ち上がり、彼は歩き出す。

次の怨敵を捜し求め。

静寂の下に、幾つもの凄絶な死を残して。

茂みの闇へ消えてゆく黒い復讐鬼の後姿。

喧騒の去った森の緑と闇は、それを静かに受け入れていった。

01 / VENGEANCE ー復讐の獣ー（後書き）

プロローグを経て、第一話ここに掲載となりました……加筆修正あるだろうけど。

書いてる本人としても思いますが……グロいですね、うん。

音楽の趣味からも伺えると思いますが、どちらかと言うとダークが好みでして。

ワイルドにドス黒く燃える人間像というのを、以前から書いてみたかったんです。

明るくポップな物語が主食の方には辛口かとは思いますが……ま、いいか（^^）

自分の作品にツッコミを入れるのも変な話ですが、現実なら奥歯に仕込んだ

金属片で導火線に火はつきませんよね（^^）

カッコ良さそうだったから、つい（笑）

幼き日、その目に焼き付けた全てを奪われる惨劇。

心を蝕む呪縛から自分自身を救うために戦う少年。

彼の正義は大衆の正義を飲み込んでゆくのか？

少年の復讐は幕を開けました。

では、また来週……じゃないな、来月かな？……いや、再来月？

まし、のんびり書かせていただきます（^^）

最後に、読んで下さった方に胸一杯の感謝を！（≡▽≡／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4040r/>

DEATH RASHーデスラッシュー

2011年3月30日18時25分発行